



いつも、松前の人の中に 義農作兵衛

自分の身を犠牲にし、麦種を守った「義農作兵衛」。

その生き方に感銘を受けた松前の人々は、さまざまな形でその精神を語り継いできました。

義農作兵衛の死から280年余りが過ぎた今一。

当時と比べ暮らしは豊かになりましたが、人と人のつながりは希薄になるなど価値観も変わってきました。

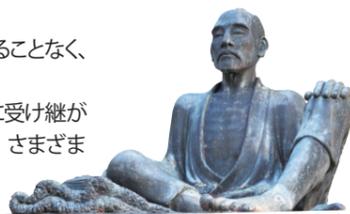
そんな今だからこそ、あらためて「義農作兵衛」と向き合い、
義農精神をみんなで共有する必要があるのかもしれない。

座談会で義農作兵衛を見つめ直す中で、私たちにとっての「義農作兵衛」について考えます。

義農作兵衛 (1688 ~ 1732)

松山藩筒井村(現松前町筒井)の農家に生まれる。幼いころから農業に励み、食べ物がなく餓死者が続出した享保の大飢饉(1732)でも休むことなく田を耕し続けたが、飢えに苦しみ倒れてしまう。

それでも後世のことを思い、麦一粒食べることなく、自分の命を引き換えに麦種を残した。義農作兵衛とその精神は今も松前の人に受け継がれ、神社をはじめ太鼓やまんじゅうなど、さまざま形で残されている。



早坂暁さん×白石勝也町長

今、義農作兵衛について考える。

早坂 私の母方の実家である堀江も海辺ですが、近くに円明寺というお寺があります。その住職が、クルス(十字架)が彫られているお墓を見せてくれました。この辺りはキリスト教徒が多かったらしく、その人たちがお墓だそう。伊予のキリストンについては、愛媛大学名誉教授である小沼大八さんの著書「伊予のかくれキリストン」に

町長 そうなんです。残っていてもおかしくない当時の草履や着る物、農機具など何もない。おっしゃるように義農作兵衛が生きた時代はそう昔ではありませんが、本来ならば神社にいろいろなものが祭られているのが普通だと思いののですが…。

早坂 このような不思議さから私の探索が始まりました。その中で、松前は「海辺」だということと、日本の農家なのに何で米ではなく「麦」なのかということが引つかりました。そこから導き出された私の結論は、義農作兵衛は実はキリストンだったのではないかとこの本です。

山内 大胆な仮説ですね。

町長 さすがに私も初めて聞く話です。

早坂 史料の中には「伊予国正木(松前)」という地名が出てきます。「感心すべき清い生活の信者多し」と書いてあるんです。それとキリストの「一粒の麦」の教え。義農作兵衛が麦を大事に守ったのはキリスト教のヨハネ伝の教えをかたくなに守った

詳しく書かれています。伊予の地で最初にキリスト教徒になったのは、堀江の6人の人たちだということがイエズス会の宣教師が報告している記録に残っているのです。また、話を聞く中でキリスト教の船が水軍の先導のもと伊予の海岸を通って大阪に向かっていたことが分かりました。こういった事柄が私の中で渦巻いて。義農作兵衛はたええられる一方、なぜか痕跡が残っていない。そのとき、私は学生時代に読んだジッド(フランスの作家)の「一粒の麦もし死なずば」を思い出し、はっとしました。この題名はキリストの言葉に由来しているのです。そこで「彼はキリストンだったのではないか」と考えました。



白石 勝也町長



松前の誇りである義農作兵衛を町内外へアピールするため、物語を制作することとした当町。作者は愛媛県出身の作家、早坂暁さんです。完成を前に、町ロゴマークを作成した山内敏功さんをコーディネーターに迎え、白石町長と3人で義農作兵衛についての座談会を行いました。



早坂 暁さん
愛媛県松山市(旧北条市)出身の作家。著書に「花へんろ」「夢千代日記」など多数。東京都在住。

山内 町制60年を迎えるに当たりさまざまな展開を行おうとする中で、地元の人びとが大きな大事にしている「義農作兵衛」についての一つの物語を、早坂先生に作ってもらおうという話になりました。義農作兵衛については内容に不確かな部分もあるようでした。今回新しい視点からの話が聞けるそうです。完成前に松前の皆さんにお知らせするため、この場が用意されました。

町長 来年が今の松前町になつて60年という、人間でいえば還暦にあたる大きな節目の年になるので、これからの町づくりや目指すべきものについて考えました。そのときに一番に思い浮かんだのが義農作兵衛です。私自身、小さいころからずっと松前には義農作兵衛という、村を、農家を救った偉人がいることを聞いてきました。町長の仕事をすると当たっても、義農作兵衛の「義農精神」を町民みんなが共有して、人のために尽くすという気持ちを持った町を目指すのが、松前町の方向ではないかと考えています。そして、今の時代だからこそ義農作兵衛を町民だけでなく、町外

の人にも理解してもらいたい、分かってもらいたいという部分は非常に強いです。

早坂 私も義農作兵衛の話は聞いてはいましたが、詳しくはありませんでした。ご依頼を受けて現地へ行ってみたら、調べれば調べるほど不思議に思いました。神社や銅像があるけれども実像が全く分らない。そして、その物証が残っていないというところに着目しました。

町長 そうなんです。義農神社は、当時の人たちが義農作兵衛を神様のように慕い、たたえ、みんなで後世まで祭ろうとお金を出し合つて造られた。だから義農作兵衛を祭つていて、神様を祭つているわけではないんです。神様のように松前の人たちは慕つて、銅像も建てたのでしようけれど…。義農神社に行つても何もないんです。

早坂 歴史的には浅く、こないだの出来事であるのに痕跡を残すものがありませんね。

山内 ご神体がないんですか、義農神社には。

いつたのではないかと思います。

町長 義農作兵衛やその家族、周辺のお百姓さんの中にも信者がいたということですか？

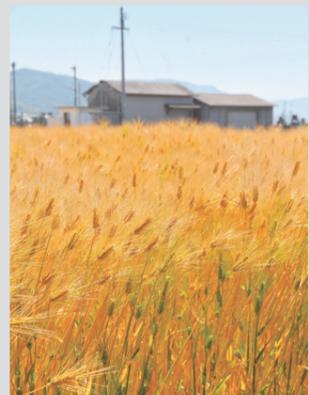
早坂 信者が多かったのだと思います。飢饉は死につながりますから、その状況は私たちの想像を超える悲惨なものです。その中で食べ物を守り切るのは至難の業です。食べ物があると分かれば奪い合いになったでしょう。でも義農作兵衛の周囲はそうならなかった。一人ではなく、みんな守つたからだと思います。

もっと詳しく

「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん、もし死なば、多くの実を結ぶべし」

これは、キリスト教の聖書「ヨハネによる福音書」12章24節に出てくるキリストの言葉です。

「一粒の麦は地に落ちて死ななければ、一粒の麦のままである。しかし、死んだなら多くの実を結ぶことになる」という意味になります。





私たちの心にいる 義農作兵衛を 見つめ直してみよう

もっと詳しく

義農作兵衛をたたえ、多くの著名人が俳句や和歌を詠んでいます。一部は句碑として顕彰されています。

宮立てて
稲の神とぞ
あがめける
正岡子規

義農名は
作兵衛と申し
國の秋
高浜虚子



高浜虚子の句碑
(義農神社内)

松前の人なら知らない人はいない「義農作兵衛」。普段の生活の中でも、さまざまな場面で義農作兵衛に関わる機会があります。

今回の座談会では、信仰心に裏付けされた信念の強さという、新しい視点からの義農作兵衛像も話されました。その中でも変わりなく大切なのは、「人のため」に命を懸けたという行為にみんな感銘を受けたということ。そして、それを自分たちだけでなく、後世にも伝えたいという思いを多くの人が持っていたということです。

私たちにとって大切なのは、このような当時の人の思いを色あせることなく後世へ引き継いでいくことです。人と人とのつながりが希薄になり、お金が大事だと考えがちになった、価値観が変わった今だからこそ。あらためて義農作兵衛とその精神に向き合い、行動や考え方を見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。その後の行動や考え方の一つ二つは、きつと未来を輝かせる礎となるはず。

あなたの心にいる義農作兵衛を今、見つめ直しませんか？



現代に通じる「義農精神」。 そして未来へ。

山内 この新説が発表されたら皆さんは驚くでしょうね。

町長 そうですね。ただ我々は義農作兵衛が何者であれ、自らを犠牲にして地域の人を救おうとしたその行為をたたえているのであって、例えキリシタンでもそれは変わりません。

山内 行為は事実であって、変わらないということですね。

町長 そのとおりです。昔から俳句や和歌など義農作兵衛をたたえる歌があります。これらを見ると義農作兵衛の行為に感銘を受けたのは事実だということが分かります。人のために自らを犠牲にするくらいの気持ちを持つこと。そして、それを後世に引き継ぐことが松前の町づくりの一番の根本だと思います。

早坂 キリシタンはまさにその考えです。義農作兵衛は「一粒の麦」の精神を信じ、周りの信者と麦を守り抜いた。飢えに苦しむ飢饉の中では、強い信仰心がないとそれを守れない。みんなそのような信仰心に支えられていたのだと思います。

町長 人のためといえば、今の日本人の「大きな災害があれば外国でも支援に行こう」という気持ちは素晴らしい。一方で文明技術はどんどん進み、人に頼らなくても自分一人で生活できるといような風潮もある。両極端なものがある現代で、今の日本人にとって義農作兵衛の精神は大事なものだと思います。

早坂 そのとおりです。切羽詰まったら人間は何をするか分かりません。修羅場のような状況で、「人を助けるといことは、

この麦をまいてたくさんを麦を作り食べてもらうことだ」という信念を誰が持てるのか。今の時代がそうです。現代はお金です。お金さえあれば何でもできると思っているけれど、お金は大抵不幸せを呼びます。その風潮と同じです。人のために尽くすのはできそうではない。

山内 話が盛り上がってききました。時間がきました。物語は春になれば聞けると思っています。

早坂 義農作兵衛を見よとは、愛媛の一部の地域の話ではなく、人間を、現代を見よということに近い警鐘になると思います。

町長 松前町が歩むべき大きな方向性が、先生のお話を聞いて間違いではなかったことを確認しました。これからもその方向で進んでいこうと思います。